

2021年9月26日～10月2日 各家庭でのディポーション用テキスト

■忍耐の訓練（2/5）

モーセは、パロの冷酷なひどい侮辱を受けながらも、それを忍び通すことができた。当時最大の権力を持っていた王が、神のメッセージをもたらした最も柔和な人に向かって、「主とはいったい何者か。私はその声に聞き従わなければならないのか」と言った（5：2 英訳）。王はイスラエルを贖われる方を無視し、またそのしもべモーセを無視した。ミデヤンから来た羊飼いに神がご命令を与えておられたことを全く知らなかったのである。王冠をいただく彼は、「私は主を知らない。イスラエルを行かせはしない」（5：2）と言って、神の命令と神の民の不服に対してただ侮辱を示すだけであった。

侮辱をいつまでも心に宿しておくなら、私たちは心に深く痛手を受け、これこそ神の道と信じて行動したことから、よろめき出てしまう。しかし反対に、私たちの目が絶えず主に注がれており、神の教えと約束を確信して堅く立つなら、侮辱を受けても、そのためにろうばいすることはない。私たちの目を、十字架にかかられた方に向けているなら、私たちは、俗人たち—その社会的地位の高低を問わず—の軽蔑に耐えることができる。「キリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくくださるからです」（1ペテロ4：14）。人々があなたを軽蔑するとき、キリストにより頼みなさい！

モーセは、群衆の根拠のない不平にもかかわらず、それに耐えた（民数11章）。神の差し伸べられる強い御腕によって、イスラエルの子らはエジプトの火の燃える

炉を逃れることができた。彼らはこの同じ御手の働きによって、紅海を渡ることができ、堅い岩から水を受け、日ごとの食物としてマナを与えられ、シナイ山の火の燃える頂上から律法を与えられ、また、昼は雲の柱、夜は火の柱という、神のご臨在を絶えず思い出させるものを備えられたのである。これ以上何が必要であったろうか。

彼らにとってそれ以上必要なものは、何もなかったのだ。それでも彼らはつぶやいた。彼らは健康的な味のよい食物を十分に持っていたが、なおもつぶやいて言った。「ああ、肉が食べたい。エジプトで、ただで魚を食べていたことを思い出す。きゅうりも、すいか、にら、たまねぎ、にんにくも」(民数11:4、5)。彼らはエジプトのにらを思い出したが、苦しい労役を思い出さなかった。きゅうりを思い出したが、残酷な束縛を思い出さなかった。にんにくを思い出したが、残虐な守備兵のことは忘れていた。魚を思い出したが、パロのことは忘れてしまっていた。エジプトにおける心もとない食糧供給のことを長い間覚えていたにもかかわらず、神が彼らの旅の間じゅうずっと食物を与えてくださっていることを、ほんの短い間しか覚えていなかったのである。

民の不合理的なつぶやきの声は、その指導者の心に、何と深く突き刺さったことであろう。彼らの叫びは、正当な理由もないのに絶え間なく続き、その泣き声はみじめであり、彼らの苦悩は他の人々を動揺させ、ついには、イスラエルの全宿営の民が狂気のように口をそろえて、彼らの指導者をののしりはじめた。モーセはここで決断を迫られた。これを耐え忍ぶか、失望に落ち込んでしまうか。しっかりと立つか、民の積み重なる不平の山に押しつぶされてしまうか。どんな犠牲を払っても神に従ってゆくか、「不平を言う者」たちの前にかぶとを脱いでしまうか。